New Horizons in Language and Communication Research

# Interaction in the Material World

# 外と対する

# 監修

伝康晴 前川喜久雄 坂井田瑠衣

### 編

牧野遼作 砂川千穂 徳永弘子



### 刊行にあたって

2009年5月末、「第1回言語・コミュニケーション研究会」と題して、有志による研究会が始まった。当初は、国立国語研究所・前川研究グループと千葉大学・伝研究室の研究員・大学院生や、近隣の大学のゆかりのある研究者たちの小さな集まりとして、月に1回、国立国語研究所の小部屋で開催していた。その後、本研究会は「LC(Language and Communication)研究会」という名称で定着し、参加者の範囲(人数や研究分野)を拡大しつつ、活動を続けてきた。この間、国立情報学研究所と共同開催するようになり、坂井田や牧野・土屋(本シリーズ編者)が幹事を務めるようになると、ますます規模や射程を拡大していった。2022年3月現在、メーリングリストの登録者数は80人を超える。これまでに90回近くもの研究発表会を開催してきた。

今回、LC研究会の活動期間が10年を超えるにあたり、これまでの発表者たちによる研究成果を論文集にまとめたものが本シリーズ『言語・コミュニケーション研究の地平』である。

LC研究会の発表者の学術的背景は、コーパス言語学・心理言語学・社会言語学・認知言語学・音声学・文法研究・方言研究・語用論・談話分析・会話分析・ジェスチャー研究・自然言語処理・ロボット工学・発達心理学・生態心理学・言語人類学など多岐にわたる。既存の分野を超えた学際的な議論を重視し、とくに若手・中堅研究者の発表を積極的に奨励してきた。本シリーズの執筆者も若手・中堅研究者が大半を占める。従来研究が見過ごしてきた問題に焦点を当てたり、既存の方法論を打ち破ろうとしたりする野心的な研究が多く集まっている。しかし、そのような試みは従来研究の立場からは理解されづらくもあり、伝統的な枠組みの中では未だ周辺的なものと見なされるのが現状である。この原因の一つとして、それぞれの研究が散発的で、互いの研究がどのような関係にあるのかが見えづらいことが考えられる。

そこで本シリーズでは、そのような個々の研究に通底する問題意識を明確に し、方法論の違いを超えて総括することで、言語・コミュニケーション研究全 体の中に位置づけようと試みた。 言語とコミュニケーションを取り巻く問題は、3つに大別できるだろう。

- 1. 自己との対峙:言語使用やコミュニケーションの過程において、 いかにして「自己 | 内での認知的な処理を遂行するかという問題
- 2. 他者との対峙:言語使用やコミュニケーションの過程において、 いかにして「他者」の行為・行動との相互調整を達成するかという問題
- 3. 外界との対峙:言語使用やコミュニケーションの過程において、 いかにして社会的・環境的要因など「外界」とかかわるかという問題

本シリーズは、それぞれの問題に焦点を当てた3巻から構成され、言語・コミュニケーションにまつわる諸研究の成果を分野横断的に収録している。これらの問題は相互に深くかかわりあっている。「自己」は他の自己と向き合うことで「他者」となり、たくさんの「他者」が集うところに生きる場としての「外界」が存在する。その一方で、我々の日常生活はつねに「外界」とかかわりあいながら営まれ、その中で「他者」や「自己」とも向き合う。「自己」「他者」「外界」のあいだに序列はなく、この3つは我々の言語・コミュニケーション行動の背後に同時並行的に存在している。3つの巻は、どれにとくに焦点を当てるかという点で違っているにすぎない。

もちろん個々の研究についても、これら3つの問題のうち2つ以上について 論じているものも多くある。執筆者には、自分自身の研究が3つの問題のうち とくにどの問題に焦点化しようとしているのかを自覚的に論じてもらった。そ うすることで、一見すると対象も方法もバラバラな個々の研究が、各巻の中で 互いにどのような関係を持つのかが見えてくるように試みた。

本シリーズによって、未だ周辺的と見なされている研究が確固たる地位を 得て、言語・コミュニケーション研究の新たな地平を開くことを期待する。

2022年3月

シリーズ監修 伝康晴・前川喜久雄・坂井田瑠衣

はじめに

## 対峙する外界とは何か

本書はシリーズ「言語・コミュニケーション研究の地平」を構成する1巻であり、本巻のテーマは「外界と対峙する」である。一般的に外界と言われると、屋外をイメージするかもしれない。勿論、本書に収められた論考の中には、屋外での人々のコミュニケーションを対象とした論考も収められている。だが、言語・コミュニケーション研究では、屋内のコミュニケーション/相互行為を対象としたからといって、"外界"を見出すことができないわけではない。そして、言語・コミュニケーション研究において多様な"外界"が存在する。本巻では、多様な"外界"を扱う論考が収められている。その多様性を理解するために、まずは「コミュニケーションに参加していない人々やモノをコミュニケーションの外側=外界と呼ぶことができる」という考え方から始めてみよう。

考えるための例として、ある研究室の指導教員Mと受講する学生Y、K、Tが参加している対面ゼミ場面を想像してほしい(図1)。コミュニケーションにお

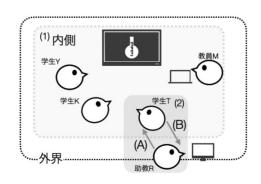


図1:コミュニケーションの"外界"と内側

ける内側とはゼミが行われる研究室の中を指し、部屋の外を"外界"と単純に呼べるわけではない。なぜならば、研究室内にもコミュニケーションに参加していない人もいる可能性があるからだ。このとき、ゼミで行われるコミュニケーション活動(発表や議論)に参加している人々をコミュニケーションの内側と呼び、これに参加していない人々は"外界"と呼ぶほうが、我々の経験的/直感的な区別にふさわしいように思われる。このような区別をすることで、締切に追われ研究室から移動せずに論文を書き、ゼミには参加しない、助教Rをコミュニケーションの外界に位置づけることができる。

ただし、助教Rは常に"外界"にいるわけではない。例えば、助教Rは作業を止めて、突如ゼミの議論に参加するかもしれない。逆に学生Tが助教Rに話しかけるかもしれない。前者は"外界"からのコミュニケーションの内側へ、後者は内側からの"外界"への働きかけといえるだろう。

このように助教Rは同じ部屋にいたとしても、コミュニケーションの内側にいるのか、"外界"にいるのかは、コミュニケーションの進行状況に応じて変化しうるのである。そして助教Rのような人が参与するコミュニケーションは様々な形で展開する。例えば、コミュニケーションに参加した後にも、助教Rと学生Tのコミュニケーションは一時的なものかもしれないし、そのまま長時間参加し続けるかもしれない。また、助教Rが学生Tとコミュニケーションするだけではなく、ゼミ全体のコミュニケーションに参加するかもしれない。

例として研究室において起こりうる可能性を列挙してみたが、ここで"外界"と内側の関係を考えるならば、3つの論点に集約することが可能であろう。まずは、"外界"側が内側に、もしくは内側から"外界"へといかに働きかけるのかという2点である。"外界"から内側へのアプローチの仕方において、"外界"のメンバーは、どのようなタイミングで、どのようにアクセスするかという点が重要になるだろう。これに対して、内側のメンバーも"外界"からのアクセスを受け入れて新たなコミュニケーションの参加者とするのか、それとも一時的なものとして扱うのか、はたまた一部のメンバーのみとコミュニケーションする形とするのかというように、"外界"のメンバーを外界のものとして接するのか、という点が重要となる。3つ目の論点はコミュニケーションの内側と

"外界"をいかに人々は区別しているかというものである。ここまで見てきたように、境界は静的なものではなく、相互行為の展開に応じて変化するものである。コミュニケーションの内側のメンバーは、この変化を起こしたり、または変化に応じて調整的な振る舞いを産出したりする。その微細な調整が、いかになされているかという点もコミュニケーションにおいて重要な論点となりうるだろう。

# コミュニケーションにおける外界としての道具や環境

例に基づいて、コミュニケーションの内側と"外界"について考えてきた。 だが、我々が行うコミュニケーションには、人を内と外で区別する以外にも、 様々な"外界"と呼べる要素が含まれている。ここでは、"道具と環境"につい て論点を整理しておこう。

"外界"に存在するものは人々だけではない。コミュニケーションの中では、特定の道具を取り扱うこともあるだろう。また、コミュニケーション行う人々を取り巻く物理的環境は常に存在し、かつコミュニケーション活動によっては、その環境を利用することもあるだろう。 ゼミ活動場面の例に戻ってみよう(図2)。 机の上に置かれている魚の骨模型は、ゼミの話題が魚の模型であっ

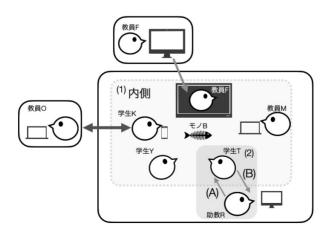


図2:コミュニケーションにおける様々な外界の模式図

た場合は、コミュニケーションの内側にあるといえるだろう。しかし、模型とは関係がない話題が展開されるときに、魚の模型はコミュニケーションの"外界"に置かれているオブジェと化すだろう。このように我々がコミュニケーションを行うとき、周囲には様々なモノが存在する。これらは道具として利用されることもあれば、環境となることもある。また道具のように利用されなくても、周囲の環境は、コミュニケーションを含む人々の活動や振る舞いを遂行するために必要なものであり、同時に活動や振る舞いを制約しうるものとなっている。つまり"外界"にある環境は、道具のように利用されたり、コミュニケーションの内側に取り込まれ利用されなくとも、コミュニケーションをする基盤となりうるだろう。この道具や環境が、いかにコミュニケーションをあの資源として巧みに利用されているかについては、Goodwin(2017)が考古学者たちのフィールドワークを対象とした研究が先駆的である。Goodwinは一連の研究を通して、考古学者が地層の色を分類する活動において、彼らは目の前の地層という環境と、マンセルカラーチャートという道具を利用し、その場の活動を巧みに進めていることを示した。

また図2に含まれているように道具には魚の模型のようなものからパソコンやスマートフォンといったように多様性がある。このことによって、我々が日常的に営むコミュニケーションも多様な様相をもちうる。よって、"外界"と対峙するコミュニケーション研究には多様なものが含まれ、本書に含まれる論考も多種多様なものとなっている。

# 本書の各論文紹介

最後に本巻に収められる各論文を簡単に紹介していこう。「外界と内側の区別」を考える上で重要なのは、Kendon(1990)によるF陣形システムという研究であろう。KendonのF陣形の研究は、オープンスペースでコミュニケーションに従事する参与者が、自身らが参与する対話空間、すなわち内側を作り上げるために、互いの位置を調整していることを明らかにした。そして、内側を作り上げるという過程とは、同時に"外界"を作り上げ区別する過程と同一のもの

である。1章の牧野の論考では、KendonがF陣形を着想するまでの流れとF陣形システムの詳細を解説し、博物館における展示物解説場面において、道具や他者という"外界"がさらに組み込まれたコミュニケーションにおいて、その特性を考慮した上で、F陣形システムの"システム"という側面について再考を行っている。

昨今の新型感染症の影響によって、オンライン遠隔会話が日常的なコミュ ニケーションの一部となりつつあるなか、こうした Kendon の対面場面のみを 対象とした人々の位置取りの理論はさらに再考するべきであろう。2章の砂 川、3章の徳永の論考では、この点に着目し、オンライン遠隔場面におけて、顔 を見せ合う状態を作り出す、つまり、物理的に離れた空間を接合し、コミュニ ケーションの内側とする可能性をもった場面について検討している。このと き、会話をしあう人を互いの取り巻く環境や他者を、相手に見える状況にする こともできる。つまり、接合されたコミュニケーションの内側から、互いの外 界に対して働きかけることもでき、かつ互いの外界からの働きかけもありうる 状況といえるだろう。砂川(2章)は、別の家に住む家族が食事や遊びといった 活動を画面越しに共有する場面の検討を行った。このとき、人々は画面越しに 映る道具や(自身も含めた)人の位置を調整し、活動を進めるための足場を作っ ていることを示している。このことは対面場面で会話活動を行うために人々 がF陣形を構築するのと同様に、画面越しの物理的には共有していない空間を も人々は内側として扱いながら、空間的な配置の調整を行っていることを示す 好例となっているといえるだろう。

徳永(3章)も、同様に離れて暮らす家族間のオンライン遠隔会話を対象にしつつ、特に食事を共にすることに焦点を当てている。食事をするということは、当然目の前には食べるための料理が置かれている。食事を共にすることを目的としたオンライン遠隔会話の中で、この料理が、ただ食べるためのものではなく、互いの家族の日常生活の情報が含まれたコミュニケーション上の資源となりえていることが分析によって示されている。そして、オンライン遠隔会話によって食事を共にするからこそ、家族間でコミュニケーションを行いうる場の共創がなされていることを示している。

コミュニケーションに従事する人々を取り巻く環境やその場に存在する 道具は、常にコミュニケーションの「内側」にあるわけでも、逆に常に"外界" にあるわけでもない。むしろ、コミュニケーションの進行に応じて、コミュニ ケーションの焦点となることもあれば、ただ人々を取り巻いているだけの環 境となることもある。1章から3章までの論考では、コミュニケーションの"外 界"と区別された内側における調整や、"外界"から内側への協働的な働きかけ に着目してきた。4章から7章では内側から"外界"へのアプローチ、特に"見 る"ことに着目した論考がなされている。

4章の領永は、内側の人々がいかに"外界"に協働してアクセスするのかについて論じ、山登りをし、周囲のモノを見渡す人々の会話の詳細な分析を行っている。このとき、"外界"は彼らを取り巻く周囲の自然である。その中で、内側のメンバーは、"外界"の中から、会話の焦点となる木、さらにその穴へと焦点を絞っていく。その中で、見ることを共有するために、人々はビデオカメラによって切り取られた画面を利用している。このような道具の利用も、"外界"をいかにコミュニケーションの中へと取り込んでいくかの好例といえるだろう。

名塩(5章)は理容店での客と理容師の会話を対象に、鏡という道具/環境と会話の関係性について検討を行った。理容店において鏡は、店員と客の目の前にほぼ常に存在するものであるが、常に会話の進行の中で利用される(=内側として扱われる)わけではない。どのようなとき、どのような形で鏡が利用されているのかについての詳細な分析を通して、語用論、会話分析、生態心理学という、まったく異なる背景をもつ分野の理論の接合を試みている。

先の2つの章では、人々が周囲の環境内にあるものを一緒に見るという振る舞いに着目した論考であった。彼らの分析対象とする会話で行われていることは、外側(=周囲の環境)へのアクセスであった。同じく「人々が一緒に見る」という振る舞いに着目しつつも、平本(6章)では、"外界"から内側へアクセスするケースについて論じている。具体的には、ジュエリーショップ内で、商品を見ている客たちに対して、店員が話しかける場面について詳細に検討がなされている。心理学で議論されてきた共視論(=共同注視)が、コミュニケーション

の内側の中で、いかに達成されているかだけではなく、さらに共視となっている状態を外界の人々は、どのように取り扱いながらアクセスしているかについて論じている。

続く7章の黒嶋の論考も、コミュニケーション中に人々が「見ること」に関わるものであり、日常的雑談から手術といった専門的な会話場面で起こる沈黙と「見ること」を結びつけて、沈黙が単に誰も話さない時間というのではなく、適切なものを適切に「見ること」のための時間としてデザインされている可能性について議論を進めている。

専門的なコミュニケーション場面の検討は、黒嶋(7章)で挙げられたような 手術場面だけではなく、様々な場面の検討がなされてきた。本巻では、蓮見(8章)が「ジャズピアノレッスン」、清水(9章)が「ブレイクダンス」といった多様 な相互行為について取り上げている。

ピアノ演奏のレッスンにおけるコミュニケーションでは、自明なことであるが人々の目の前に置かれているピアノが重要な道具となっている。蓮見(8章)が対象とするジャズピアノレッスン場面では、教師と生徒のそれぞれの目の前にピアノが置かれている。この状況において、ピアノという道具は、それぞれの練習において重要なだけでなく、演奏を適切に遂行するために、どのように配置されているのか、演奏中にピアノの鍵盤内のどこが指し示されているのか、といったことを理解するための重要な資源となっている。この論考は、道具が単なる道具として相互行為の中で利用されるだけではなく、道具自体の空間的配置や道具内の空間的配置が相互行為資源として利用されている可能性を示すものとなっているといえる。

清水(9章)による論考では、収録されたブレイクダンス場面を対象にしつつ、他の論考における定性的な事例分析とは異なり、実験的に収録したデータ内のセンサーデータに対して時系列分析を行っている。定量的アプローチではあるものの、人々の振る舞いを単に定量化するのではなく、個々の振る舞いについて詳細な検討に基づく論考を進めている。ブレイクダンスは、パフォーマー(ダンサー)、ダンスのための音楽を用意するDJ、そして審判、観客といった様々な人が織りなす相互行為である。9章では、特にパフォーマー間、パ

フォーマーとDJ間の相互行為の有り様を微細な時系列データの検討に基づき 記述している。この記述は、清水らが提唱する新たな枠組みに基づくものであ り、これまでの実験的な人々の動作の同期・非同期研究とは一線を画す試みと なっている。この試みは、これまで上手く融合しきれなかった定性的記述に基 づく相互行為研究と定量データに基づく相互行為の検討を結び合わせる研究 の端緒となるものであると考えられる。

以上のような人々のコミュニケーションと"外界"の関わりについての詳細 な検討は、より日常生活に寄り添った工学的応用の形を導きうるものとなる だろう。"外界"からのアクセスに対して内側の人々は、上半身だけを振り向く か、体全体を相手に向けるかによって、相手との会話を一時的なものとするか、 長く続くものとするかを示すことができることが定性的研究によって知られて いる。10章の川口では、この人々の日常的な振る舞いである身体捻りをロボッ トに実装し、絵画解説タスクの実験の結果が報告されている。1章から9章ま で各著者がつぶさに観察し、詳細な記述に基づき構造を明らかにしてきた、 人々のコミュニケーションの有り様も、工学的な応用(=ロボットやアバターへの 実装)に対して重要な視座を与えるものとなっているといえるだろう。川口(10 章)は、単に身体の捻り方を実装し、その効果を統計的な差異などによって示す だけではなく、そのロボットに対して人々がどのように振る舞っているかの検 討を試みている。このことは、定性的な相互行為研究によって提供されたアイ ディアが実装されたロボットやアバターに対して、さらにそれに対して人々が どのように調整し対応しているかという新たな論点を提示しているという点で 相互行為研究の螺旋的な未来を示すものとなっているといえるだろう。

2022年3月

編集 牧野遼作・砂川千穂・徳永弘子

### 参考文献

Goodwin, Charles. (2017) Co-Operative Action, Cambridge: Cambridge University Press.

Kendon, Adam. (1990) Conducting interaction: Patterns of behavior in focused encounters, Cambridge: Cambridge University

Press.

目次

ii 刊行にあたって

iv はじめに

xiv 共通の書き起こし記号一覧

01

002 F陣形システム再考 環境に応接した身体配置

牧野遼作

02

028 遠い外界に参与する インタラクションの足場作りと参与構造の調整

砂川千穂

03

052 「食事」がつなぐ遠隔地間親子コミュニケーション

徳永弘子

04

074 巣穴が見えるまで— 概念の獲得とカメラフレームの利用可能性

須永将史

05

102 日常会話を伴う理容活動に状況づけられた「見る」

----鏡を介した「見る/見せる」の分析

名塩征史

06

126 相互行為の中の共視

平本毅

07

150 同定・観察・確認行為の構成における「見ること」の相互行為的基盤

黒嶋智美

08

170 即興演奏はいかに教えられるのか

蓮見絵里

09

194 上演芸術における演者間インタラクションに対する 多層的なアプローチ

清水大地

10

216 鑑賞支援ロボットの身体動作が人間の身体配置に与える影響

川口一画

236 執筆者紹介